

『最果亭の災禍』

<物語の背景>

魔族の支配地までそう遠くない、辺境の峠に宿屋「最果亭」があった。一見すると普通の宿屋だが、ここは魔族との争いにおける人間側の最前線となる拠点だ。

「特別な魔法で防御されていますから、一度扉を閉めてしまえば、どんな魔物も入ってこられません！しかも宿そのものが強力な结界になっていますので、宿の中では並大抵の魔法では効果を発揮しないのです！」と宿の主人は得意げに語った。

恐るべき魔王の復活によって始まった魔族との長年にわたる戦いは、大陸を統一支配するこの国でさえ消耗させ、多くの犠牲者をだし、民衆の生活は疲弊と困窮へと追い込まれていた。あるいは勝てないのかもしれない。そう考え、郷土を捨て、魔族の手が及ばぬ別の大陸へと逃げ出す者もいた。・・・その選択肢をもつ一部の貴族や裕福な商人たちに限られてはいたが。

しかし、まだ希望はある。はるかな伝説の時代に、一度は魔王を打倒したという、伝説の勇者——その子孫である勇者ならば、再び魔王を倒し、魔族との戦いに勝利をもたらすことができるかもしれないのだ。いや、きっと勇者ならできる。人々は最後の希望を託し、勇者と、彼を支える精鋭たちにこの国の運命を委ねることにしたのだった。

夕闇が迫るころ、続々と集結してきたのは、魔王討伐の為に集められた精鋭たちだった。彼らはこの地で落ち合い、明日、魔族との最終決戦の地へと赴く予定だった。

「皆、よくぞ集まってくれた！さあ、今宵は大いに英気を養おうではないか！」

高らかに告げた人物は「勇者」だ。実際に会うのは初めてだが、彼の持つ聖剣（せいけん）の一撃だけが、魔王を討ち滅ぼすことができると誰もが知るところだ。

勇者が酒杯を掲げた時、誰からともなく歓声があがる。そう、困難な討伐になるだろうが、しかし誰一人怯むものはいなかったのだ。その日の夕餉は大いに盛り上がり、やがて皆、しばらくは望めないであろう、心地よいベッドでの眠りにつくため、それぞれの部屋に向かった。

翌朝、宿の主人の叫び声に驚き、全員がそれぞれの部屋を飛び出してみると、狼狽した主人が悲劇の幕開けを告げた。

「勇者様が死んでいる！」

主人が指さす先には、ベッドの上で胸から血を流したまま冷たくなった、勇者の死体があったのだった・・・。

<登場人物>

- ・ 戦士（男性）
- ・ 魔法剣士（男性）
- ・ 魔法使い（女性）
- ・ 武闘家（女性）
- ・ レンジャー（男性）
- ・ メイド（女性）
- ・ 盗賊（男性）
- ・ 騎士（男性）

